

特選

『みんなが参加する福祉』

田丸小学校 六年 見並 麻理菜

「福祉」の意味って何か調べてみると、「人々が安心してくらせる環境」と書いてありました。世の中には様々な人が、くらしています。例えば生まれつき目の不自由な人、耳が不自由な人です。体は大丈夫でも、一人で色々できなくて人の助けがいる人もいます。小さい子供もいれば、お年よりもいます。私のおじいちゃんや知り合いの多田さんみたいに仕事で事故にあい、車イスの人もあります。多田さんは首を傷め、手足が動かせなくなり、色々なお手伝いが必要です。他にも難病で治る見こみがなく症状が悪くなり、お手伝いが必要な人など様々な人がくらしています。

私達は決して一人では生きていきません。それは体が不自由とか関係なく、人はそれぞれ支え支えられて生きているんだと思います。「人」という文字のようにです。だから元氣な私達は不自由な人を、たくさん助けてあげたいと思います。私はまだ目の不自由な人や耳の不自由な人には会ったことがありません。お母さんが、「都会に行くとき普通にそういう方に会うよ。」と、言っていました。地下鉄やバスでもたまに会うらしく、みんなでお手伝いそうです。お母さんも、手話や盲人ガイドを習った経験があるそうです。お父さんも名古屋で仕事をしているので色々な人に会って手伝ったりするそうです。名古屋にはノンステップバスがあって乗り降りを手伝うらしいです。三重にもあるのかなあ…と思いました。

私はバスに乗った事がないので分かりません。

私は、手話や色んなガイドを、わざわざ習いに行かなくても学校で普通に勉強できる日が、いつか来るといいなと思います。そうすれば、困っている人にバツタリ出会った時、自然に声をかけ手を差し出せると思います。困った人を見たら、みんなが助けられる社会は、いいなと思います。自分も困っている時に声をかけたり助けてもらったらうれしくなります。心が、あたたかくなるし、「やさしさっていいな。」「友達っていいな。」と思えます。

きつと福祉って、そういうことなのかなと思います。特別な事ではないということです。誰でも助ける人になるし、手伝ってもらう人にもなります。ごく自然に、みんなが手をかせば、お年寄りも、体の不自由な人も、心があたたかくなります。私も、みんなに感謝をしながら、がんばりたいです。キラキラ光る社会になって笑顔いっぱいになるように小さい事から始めたいです。おじいちゃん、おばあちゃんの事、十八年生きている犬の事もお手伝いしてあげたいです。

特選

『自閉症について』

玉城中学校 二年 磯野 真秀

私の弟は障がい者です。自閉症という障がいをもっています。自閉症というのは、同じ行動を繰り返したり、言語の発達がおくれたりすることです。だから、弟が怒っていたり悲しかったりしても自分の言葉で表現することが苦手なので、相手をたたいてしまうことや、なぐってしまうことがあります。母や祖母と、弟の学校生活の話をしたときに、怒った話や泣いた話、クラスの子をたたいてしまった話を聞きます。その話の中で、とても印象に残った話があります。

運動会するとき、一年生から四年生まで先生がそばについて、競技や演技をしていました。でも、五年生では運動会の練習を重ねていくうちに先生がそばについていなくても、周りの友達の支えもあり、運動会にしっかり参加していました。今年行事が終わった後は、昨年と比べると、落ちつきが見られ、少しずつですが、ちゃんと成長している弟の様子を、家族みんなで話して、喜んでいきます。そうやって成長していけるのは、周りの支えがあるからだと思います。弟が自分で行動できないとき、それを察して周りの友達が教えてくれたり、手を引っぱってくれたりします。先生から、そのような話を聞くと、私もうれしく思います。

弟は、この春から新しく始めたことがあります。それは、放課後デイサービスという、支援の必要な子ども達が利用できるサービスです。簡単にいうと、児童館のような役割をし

ています。

初めての利用では、事前に弟に利用する日にちや曜日を話していましたが、いざそのときになると、不安だったようで、送迎の車に乗るときはとまどっていたそうです。でも、回数を重ねていくうちに、支援の先生や周りの子ども達にもなれていき、弟が自分から、手をつなぎに行くことのできる友達もできたそうです。

こういったサービス利用することで、いままでとはちがう経験ができ、弟の成長につながるのだと思いました。

しかし、サービスを始めてしばらくたってから行きたくないといい様子を見せてきました。そういった弟の思いも支援の先生達へ伝えて、弟が不安にならないように関わってもらうことで、今では、嫌がることなく楽しんでいる様子です。そのサービスを利用している時の写真を見せてもらいました。弟がとても楽しそうに笑っている写真でした。デイサービスを利用するようになって、弟は楽しそうにしている場面が増えたので、良かったと思いました。

弟はデイサービスを利用することで、支えてもらい、色々な経験ができています。自閉症の方達だけではなく、障がい者の方達にも、「支えてもらう」ということは、とても助かることです。もし、身近に支援の必要な方がいたら、相手のために、何が支援になるのか、自分でもしっかり考えて、行動できるような人になりたいです。

そして、放課後デイサービスもそうですが、さまざまなサービスがあることで、色々な経験ができることが、大きな支

援となっっているのだと思いました。

こういった支援のサービスのように、普段の生活の中でも、支援の輪が広がり、支えあつていけるような、環境づくりがこれから大切だと思えます。このような支援があることを、たくさんの人に、知ってもらえたらいいなと思います。



入選

『不自由な人たちについて』

田丸小学校 六年 青木 那菜

私がこのテーマを選んだのは、今一緒におじいちゃんとおばあちゃんと住んでいて、今は元気でも、何年後かにはかい護が必要になるかもしれないと思ったからです。また、今から福祉について考えることがおじいちゃんとおばあちゃんに役に立てると思ったからです。

私は今健康ですが、私がふだんあたり前と思っていることも、体の不自由の人たちにとってはあたり前ではなく、大変なことが多いことがわかります。それは、玉城町の町を歩いていても思いました。ちよつとしたんさやデコボコも、車イスの人たちにとっては、不自由で危ないと思えました。ほかに、点字ブロックの上に自転車が置いてあったり、点字ブロックの上で遊んでいる人たちがいたり、点字ブロックの上を歩いていたりする人がいたりすると目の不自由の人たちにとっては、めいわくということがわかります。

今までの私には、全く分からないことでしたが、このようにふだんの生活をふり返って考えることが相手の立場になって少しでも考えることが必要なんだと思えました。

病気・けが・障害をもった様々な人がいます。玉城町がそういう人たちにとって、不自由を感じないようにするために、気をつけることがいくつもあります。

例えば、さつき例であげた不自由な人たちにとって、困っ

ていることを改善するのに、点字ブロックの上に自転車を置かないことや点字ブロックの上で遊ばないなどを気をつけるべきだと思います。他にもたくさん気をつけるべきことがあります。

このようなことを意識して生活していくことで、困っている人たちが減ってくると思います。また、自分だけが意識していても、ほかの人が出来ていかなかったら、あまり効果がないので、自分から周りにこのようなことを伝えていこうと思います。そして、いろいろな人が過ごしやすいようになるといいなと考えました。



入選

『夏休み福祉体験教室で学んだこと』

有田小学校 五年 中林 大和

ぼくは昨年、お母さんが働いているしせつの、福祉体験教室へ参加しました。そのしせつは、お年よりがたくさん生活しています。ごはんを食べたり、リハビリをしたり、レクリエーションに参加したりしていました。

まず、リハビリ室で車いすに乗る体験をしました。乗せてもらう側と、介助者の両方を体験してみて思ったことは、こわいという事です。ぼくは、車いすのり、介助者に車いすを押ししてもらいました。小さなだん差や、押すスピード、進方向がわからなく、とても不安でした。介助者は、右へ行く時は右へ、左へ行く時は左へ、止まる時は止まるなど、しっかりと声かけをする事により不安がとりのぞけると教えてもらいました。

お昼ごはんの時はごはんをたべる前、ラジオ体操そうをして軽く体を動かします。そしてお年よりが昔から知っているような歌も歌っていました。ぼくたちが、ふだんふつうにしている事でも、お年よりはうまく体が動かせなかったり、声が出せなかったりと、大変そうに見えました。パタカラ体操そうといって、口の体そうもしていました。この体そうは、ごはんを食べる前になると、食べ物をとのおくまで送りこみやすくしたり、飲みこみやすくしたりする体そうだと教えてもらいました。ごはんの形には少しおどろきました。一人一人

ごはんやおかずの形や量がちがいます。水分がうまく飲みこみにくい人には、ゼリー状にしたり、うまくかむ事のできな人には細かくきざんであったりと、いろいろな工夫がされています。

デイサービスといって、家から毎日リハビリや、お風呂に入りにくるようち園みたいな場所も見学に行きました。そこのおじいちゃんおばあちゃんは、少し元気で、ぼくたちいろいろな話を聞かせてくれました。

ぼくがこの福祉の体験教室で学んだことは、お年よりはだんだんと体や心がおとろえてきます。足が不自由な人には、手をひいて一緒に歩いてあげるのも介護。耳の聞こえにくい人には、耳元でゆつくりやさしく話してあげるのも介護。そして何よりも、不安やさびしさを取りのぞくために、そばにいてあげるだけでも介護になることを知りました。一緒にいてぼくの手をにぎりながら、ニコニコ笑いながらうれしそうにしていたおばあちゃん。そのすがたを見ていてぼくもなんだか温かい気持ちになりました。おじいちゃんも、おばあちゃんも、みんなとてもかわいかったです。

入選

『しょうがいのある人との出会い』

下外城田小学校 四年 松田 向繰

わたしは、車イスで生活している人と、手話で会話している人と出会って、すごいと思った事がありました。それは、車イスで生活している人も、手話で会話している人も、ここにことえ顔だったからです。

なぜ思ったかと言うと、わたしならほかの人と自分はちがうと思ってしまうと、心が折れてしまったり、足が不自由だったり、耳が聞こえなかったりしたら、もういやだと思ってしまうからです。でも、わたしが出会った人は、ちがいました。暗い顔などしていなくて、え顔で会話が出来ました。だからわたしは、思いました。しょうがいがあっても、ふつうの人と同じように生活できるように、そして、ほかの人にもしょうがいのある人たちがどれだけ大変かを伝えるために福祉があるのかなと思いました。わたしも、福祉学習で、しょうがいのある人のつらい事なども学びました。

わたしは、この経験を忘れずに、こまっっている人にやさしく声をかけられるようにしたいです。そして、福祉学習があつて、しょうがいのある人と出会って、今、このようなことができるきっかけになったのかと思います。

わたしは、しょうがいのある人ない人関係なくだれとでも、会話ができるようになりたいです。それがしょうがいのある人を元気づけるきっかけになったらいいと思うからです。そ

して、車イスに乗っている人を見かけたら、出来るかぎり手伝えるようにしたいです。周りの人も、そんなふうにおもいやりのある人がいっぱいいてほしいです。わたしの出会った足の不自由な人は、

「なんでも出来る。」

と言っていました。みんなと同じように話をしてくれるのが一番いいと言っていた言葉がとてもいんしょうてきでした。だからわたしは、気を遣わず、ふつうに会話をする事がいいんだと思いました。

文化祭で、わたしは手話で発表しました。短い時間でしたが、福祉の事を来てくださったみなさんに少しでも伝えられた事が良かったです。

わたしは、この経験を生かして真つ直ぐ一生けん命に生きていこうと思いました。そして、こまっている人を見かけたら、ゆう気を出して手助け出来るような人になりたいです。



入選

『助け合いの世界へ』

下外城田小学校 四年 吉高 僚眞

ぼくは、目や足の不自由な人の力に自分がなれたらいいなと思いました。みんなが助け合えたらくらしやすくなると思います。

そう考えた理由は、二つあります。

一つ目は、不自由な人に出会って自分には、何が出来るかなと思いました。不自由な人は、自分一人では、どうしようと思うことがあると思います。そんな時に助けられたらよくなると思います。

二つ目の理由は、手伝えることが出来たらよくなると思います。こまっっている人を手伝って、

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

と言う会話が出来たら、二人とも幸せな気持ちになれると思います。

ぼくは、その会話をたくさんの人が、たくさんの人に、しようがある、ないに関係なく出来るといいなと思います。みなさんは、あいさつをしていますか。あいさつは、人を元気に出来ると思います。でも、あいさつをしても、返事を返してもらえない時があります。そんな時は、「あれっ、聞いていないのかな。」と思います。そして、少しいやな気持ちになります。だから、ぼくは、あいさつをした方がいいと

思います。

ぼくが、この事を考えるきっかけになったのは、目や足が不自由な人は、こまっけてもなかなか助けてほしいと声をかけれない事があるんだなと思いました。そんな時、あいさつをしてくれる人がいたら、話しやすいし、声もかけやすいだろうなと思います。だからあいさつは、大切だと思います。ぼくも、あいさつが返せない時があるので、みんなが元気になれるように、大きな声であいさつをしたいです。

目や足が不自由な人は、事故やけがなどでつらいけいけんをたくさんしていて、やりたくても、出来ない事があると言っていました。たくさんのかべをのりこえて来たんだなと思います。

みんな、くらしていると、とつぜん大きなかべがあらわれる事があると思います。そんな時に、手を取り合って助け合いながらかべをのりこえる事が出来たらいいなとぼくは思います。それでも、かべをのりこえる事が出来なければ、たくさんの人で助け合えばかべをのりこえる事が出来ると思います。もし、友だちがこまっけていたら、自分が力となって、友だちのかべをいっしょにのりこえる手助けを出来る人になりたいです。

これからは、こまっけている人がいたら、はずかしがらないで、声をかけたり、にもつを持ってあげたり、席をゆずってあげたりしようと思います。

そんな人が世界中にたくさんふえて、助け合いの世の中になったらいいなと思います。そして、どこに行っても、

「ありがとう。」
の言葉がたくさん聞こえる世界になってほしいです。



入選

『おばあちゃんの思い』

玉城中学校 二年 溝口 優奈

久しぶりに母の実家に行きました。学年が上がるにつれて、勉強に部活に忙しくなり、気付けば、もう長い間、おばあちゃんに会っていない気がしました。身長が伸びていく私とは対照的に、なんとなく小さくなっているおばあちゃん。体力がついていく私と、だんだん体の機能が衰えていく、おばあちゃん。数日前、久しぶりに会ったおばあちゃんは、以前より更に小さくなったような気がしました。

私のおばあちゃんは、今年で七十四歳になります。いつも元気で何十年も病気ひとつしたことのない人でした。しかし、今年の夏に脳梗塞を少しおこし、入院することになった時は、とても驚きました。そして、その脳梗塞がきっかけとなり、血管性認知症になりました。話好きで、いつも陽気に話しかけてきた、おばあちゃんだったけど、最近は少ししゃべるのがもどかしそうです。頭では分かっているのに上手く言葉として出てこないそうです。

そんなある日、母がおばあちゃんを病院に連れて行くとうので、夏休みで部活も午前で終わった私は一緒に付いていくことにしました。病院のあと買い物に行き、笑顔でいたおばあちゃんの顔が、お会計のときに辛そうな、もどかしそうな顔に変わりました。病気の影きようで手が少しこわばり、うまくお金を出せないおばあちゃんは、レジでもたもたして

しまい、だんだん他の人がイライラし始め、店員さんも困っている様子が遠くから見ていた私にも理解できました。母が助けの手を差し出しましたが、それでも他のお客さんと比べると、おばあちゃんがレジにいた時間は長かったです。「すみません」とおばあちゃんは店員さんにも、後ろに並んでいたお客さんにも謝りましたが、どの人も業務的、機械的な反応しかしなかったことが忘れられません。おばあちゃんの悲しそうな顔、悔しそうな顔を見た時、私は「もっと皆、おばあちゃんに優しくしてよ」と腹が立ったと同時に、おばあちゃんに対して何の手も差し伸べることが出来なかった自身にも腹が立ちました。おばあちゃんの表情に気付いていたのに、周りから困った顔で見られている場に飛びこんでいく勇気がどうしても持てなかったのです。いつも笑顔でいるおばあちゃんの本当の辛さ、苦しさに気付き、思いやりの手を差し出さなければならなかったのだと心から思いました。

私たちの周りには、私のおばあちゃんよりもっと障がいのある人、目や耳、足が不自由な人がたくさんいます。そのような人に、うつとうしいなあと思うのではなく、進んで手を差し出せる人こそが、本当に優しく、思いやりのある人だと思います。世界にはたくさんの方がいて、皆それぞれ性格も言葉も違います。おばあちゃんのように、健康そうに見えても病気で言葉が上手く話せない、手足の動きが遅くなるなど、障がいがあるとは分からない人もいると思います。これらの人に対して「優しくしましょう」「手助けをしましょう」という言葉はよく耳にしますが、その場面に遭ぐうした時、自

ら手を差し伸べることができる人は何人いるのだろうか？と思います。実際に行動を行うのは簡単なことではないと思います。自分から声をかけ、手を差し出すのは、かなりの勇気がいると思いますが、まずは身近にいる人に優しい手を差しのべたいと思います。おばあちゃんが辛い思いをしなくていいように、これからは私がお会計のお手伝いをしてあげたいと思います。



